



# ドイツ語自由与格構文における「使役」と「被害」の意味 英語のhave使役文・日本語の「させ」使役文と対比して

著者	高橋 美穂
雑誌名	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要
巻	5
ページ	57-70
発行年	2019-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00125313">http://hdl.handle.net/10097/00125313</a>

【論 文】

# ドイツ語自由与格構文における「使役」と「被害」の意味 —英語のhave使役文・日本語の「一させ」使役文と対比して—

高橋 美穂<sup>1)</sup>\*

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構

本稿では、「使役」「被害」という異なる意味解釈が可能なドイツ語の自由与格構文を取り上げる。移動あるいは状態変化を表す動詞を対象に、「被害」とならび「使役」の解釈が可能となる条件を明らかにする。さらに、先行研究でドイツ語の自由与格との類似性が指摘される英語のhave使役、ならびに日本語の「一させ」使役との対比を行う。have使役文および「一させ」使役文について、「使役」ないし「被害」の解釈が可能・不可能となる例をあげ、ドイツ語のデータと比較しながら、各構文で「使役」と「被害」の意味が競合する環境を明らかにする。そのうえで、言語間の解釈の条件づけの違いを示す。ドイツ語は「被害」読みを基底とし、動詞の意味やダイクシス性に条件づけられて「使役」の意味が加わるのに対し、日本語では「使役」ベースの構文において使役主の意図性が失われる環境で「被害」読みが顕在化する。英語のhave使役は両者の中間として位置づけられる。

## 1. はじめに

である与格が、「自由与格」と呼ばれる。

### 1.1 本稿の目的と対象

本稿では、「使役」「被害」という異なる意味を持ちえるドイツ語の自由与格構文を取り上げる<sup>1)</sup>。移動あるいは状態変化を表す動詞を例に、どのような条件のもとで「被害」とならび「使役」の解釈が可能となるのかを明らかにする。さらに、McIntyre (2006) など自由与格との類似性が指摘される英語のhave使役、ならびに日本語の「一させ」使役との比較を行う。英語のhave使役文と日本語の「一させ」使役文は、先行研究において指摘されたとおり、いずれも「使役」と「被害」の解釈が可能である。これらの構文をドイツ語の自由与格構文の例と対比させることで、先行研究において議論される解釈の条件を検討することを目指す。さらに、分析の結果として、独・英・日語間で意味解釈の条件付けが異なること、その違いはそれぞれの言語の構文の特性によることを明らかにする。

#### (1) 目的語の与格

- a. Das Kind hilft der Mutter.  
the child helps the mother-DAT  
子供が母親に手を貸す。
- b. Frost schadet dem Getreide.  
frost harms the grain-DAT  
霜で穀物がだめになる。

#### (2) 自由与格

- Er hat mir das Auto gewaschen.  
he has me-DAT the car washed  
彼は私のために車を洗ってくれた。

ドイツ語の自由与格の用法にはいくつかの下位分類が知られている。代表的なものには「所有の与格」、「利益・不利益の与格」、「判断の与格」、「関心の与格」がある (Duden 2005, Helbig 1984)。とくに「所有の与格」と「利益・不利益の与格」は関連性が高く、相互に区別をつけるのが難しい場合もあるとされる。以下に「所有の与格」、「利益の与格」、「不利益の与格」の例をそれぞれあげる。

### 1.2 ドイツ語の自由与格

分析に先立ち、ドイツ語の自由与格について、その特徴を紹介する。以下の(1)における「間接目的語」のように動詞の語彙的意味によって要求される与格に対して、(2)のような動詞の語彙的意味によらない項

\* ) 連絡先: 〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 miho.takahashi@tohoku.ac.jp

(3) 所有の与格

Mir                   schmerzt    der Kopf.  
me-DAT           aches       the head  
私は頭が痛い.

(4) 利益の与格

Der Pförtner       öffnet    ihr           die Tür.  
the doorkeeper   opens    her-DAT   the door  
門番が彼女のためにドアを開ける.

(5) 不利益の与格

Das Kind           zerbrach ihm       die Vase.  
the child           broke    him-DAT the vase  
彼の都合の悪いことに子供が花瓶を割った.

以下、本稿で分析の対象とする「使役」「被害」解釈が共存する自由与格構文に該当するのは、主として (4) や (5) の例のような「利益・不利益の与格」である。与格が「利益」「不利益」のどちらで解されるかは、文脈に依ることが多い。例えば (4) の例は、「門番にドアを開けられたこと」が与格の「彼女」にとって望ましくない場合、「不利益の与格」と見ることもできる。また、(5) の例も文脈次第—例えば「彼」が花瓶を割ることを望んでいるような特定の状況—では、「子供が彼のために花瓶を割ってあげた」という「利益」の意味で解することが可能である。このように、基底動詞が *öffnen* (= *open*) 「開ける」や *zerbrechen* (= *break*) 「割る」のような他動詞である場合、与格の「利益」「不利益」の意味は往々にしてオープンであるとされる (Ogawa 2003: 218-219)。その一方、基底動詞が自動詞の場合、与格で表されるのは概して「不利益」の意味であるとされている (Wegener 1985: 200)。ドイツ語自由与格構文はこのような「不利益」すなわち「被害」の意味が表される環境で一定の条件のもと、「使役」—しかも第2節で述べるとおり、与格の人物の意図によらない事態の引き起こし—の意味を帯びるようになる。

### 1.3 独・英・日本語の構文間の共通点と相違点

ドイツ語の自由与格構文は、基底述語に対して新たに追加された項、すなわち与格の人物が事態から利益や不利益を受けるという意味で経験主 (experiencer) を表しえるという点で、英語の *have* 使役文との類似

性が認められる (例えば McIntyre 2006 参照)。(6) はドイツ語の自由与格、(7) は英語の *have* 使役文の例であるが、いずれにおいても、「子供が死ぬ」という事態から与格ないしは *have* の主語が影響を受ける、ここではとくに被害感をもってその事態を受けとめているという意味が表される。

(6) Mir ist mein Kind gestorben.

me is my child died

「子供が死んでしまった」[被害]

(7) I had my child die.

「子供が死んでしまった」[被害]

英語の *have* 使役文は一「使役文」である以上当然のことではあるが—表される事態が実現するよう、*have* の主語が意図をもって働きかけるという意味も表す。以下の (8) のような例では、「使役」読みと「被害」読みのいずれも可能である ((8) は Ritter and Rosen 1993: 525 からの引用)。しかし、英語の *have* 使役で「使役」と「被害」の両解釈が可能な環境をドイツ語の自由与格に置き換えてみると、(9) のとおり「被害」の意味しか生じない。ドイツ語自由与格構文で「被害」とならび「使役」読みが可能となるのは、(10) のように対象 (theme) の変化が表される場合であり、(9) のような動作主 (actor) が出現する環境では「使役」の読みは認められない。

(8) John had half the students walk out of his lecture.

「クラスから出ていかせた」[使役]

「クラスから出ていかれた」[被害]

(9) Dem Johann sind die Hälfte der Schüler

the John-DAT are the half of the students

aus dem Klassenzimmer gelaufen.

out of the classroom walked

「クラスから出ていかれた」[被害]

# 「クラスから出ていかせてしまった」[使役]

(10) Dem Johann ist die Vase zerbrochen.

the John-DAT is the vase broken

「花瓶が割れてしまった」[被害]

「花瓶を割ってしまった」[使役]

また、不利益や迷惑などの望ましくない「被害」の意味を表しうるドイツ語の自由与格は、先行研究において、日本語の「間接受身」との類似性が指摘されている（例えばOgawa 2003）。以下の（11）、（12）のとおり、日本語では間接受身文で表される事態を、ドイツ語は自由与格によって表すことができる。

- (11) a. 私はその男に車を壊された。  
b. 私は子供に死なれた。
- (12) a. Der Mann hat mir das Auto kaputtgemacht.  
the man has me-DAT the car broke  
b. Mir ist mein Kind gestorben. (= (6))  
me-DAT is my child died

(11b) の「子供に死なれた」のような間接受身との「似通い」（早津 2016）が指摘されるのが、以下の（13）のような「一させ」使役文である。

- (13) 私は子供を死なせた。（cf. (11b)）

(13) の「一させ」使役文では、主語の「私」はたしかに使役主（causer）であるものの、その事態の発生を防げなかったことに後悔や自責の念を抱いていることが表されるとき、間接受身文—「私は子供に死なれた」で表されるような「被害」の意味を帯びてくる。この「死なせた／死なれた」のような例は、間接受身と通じる意味を持つ使役文として従来取り上げられてきたとされており（早津 2016: 293）、「使役」と「被害」の解釈が競合する例であるといえる。

このように、ドイツ語の自由与格構文、英語の have 使役文、日本語の「一させ」使役文は、それぞれ「使役」「被害」という異なる二つの意味を持ちえるという点で共通性があるものの、例えば上掲（8）の英語の例と上掲（9）のドイツ語の例で示されるとおり、両解釈が競合する環境は一様ではない。また、上掲（10）のとおり、ドイツ語自由与格では「被害」の意味が表される環境で一定の条件のもとに「（意図しない）使役」の意味が生じてくる一方で、日本語は「使役」ベースの構文で「被害」の意味が生じてくる（例えば上掲（13）参照）。本論文が目指すのは、独・英・

日本語の構文間で認められる共通性・類似性を確かめたうえで、可能な解釈の条件づけが言語間でどのように異なるのかを明らかにすることである。

## 2. ドイツ語自由与格構文の解釈

Schäfer (2008) などで指摘されるとおり、ドイツ語の自由与格構文では「使役」「被害」という異なる二つの解釈<sup>2)</sup>が可能である。例えばzerbrechen (= break) 「割る／割れる」のような他動詞用法と自動詞用法が同形態の状態変化動詞では、「被害」「使役」の両解釈が認められる。ただし、英語の have 使役の場合とは異なり、ドイツ語の自由与格構文の「使役」解釈では、与格で示される人物が表される事象を意図せずに引き起こしてしまったことが示唆される。また、zerbrechenと同じように状態変化を表す動詞であっても、sich öffnen (= open) 「開く」のような再帰動詞においては、「使役」解釈が得られず、「被害」解釈のみが可能である。以下、「被害」「使役」解釈が可能な例、「被害」解釈のみが可能な例である（(14) および (15) は Schäfer 2008: 42, 45 からの引用）。

- (14) Die Vase zerbrach dem Hans.  
the vase broke the Hans-DAT  
「花瓶が割れてしまった」[被害]  
「花瓶を割ってしまった」[使役]
- (15) Der Maria öffnete sich die Tür.  
the Maria-DAT opened REFL the door  
「ドアが開いた」[被害]  
# 「ドアを開けてしまった」[使役]

また、状態変化動詞のほか、fallen (= fall) のような移動動詞においても、自由与格構文で「被害」と「使役」の解釈が可能である。

- (16) Mir fiel die Flasche auf den Boden.  
me-DAT fell the bottle onto the floor  
「瓶が落ちてしまった」[被害]  
「瓶を落としてしまった」[使役]

以下本節では、高橋 (2015) および Takahashi (2017)

におけるコーパスを活用した事例の調査結果をもとに、自由与格構文で可能な解釈を決定づける要因を明らかにする。分析の対象は、(14), (15) のような状態変化動詞および (16) のような移動動詞である。移動動詞に関しては、(16) の *fallen* のように、「被害」となり「使役」の解釈が可能となる「受動的移動」<sup>3)</sup>を表す場合を対象とする。

以下、移動動詞と状態変化動詞を例に、ドイツ語の自由与格構文で「使役」解釈が可能となる条件を明らかにする。具体的には、自由与格構文においては与格の人物と対象物との間の「所有関係の変化」が可能な解釈を決定づける要因であることを示す。

## 2.1 移動動詞における「使役」解釈の必要条件

まず、「使役」または「被害」という自由与格構文の異なる解釈は、移動動詞においては与格の人と移動物との間に成立する移動のダイクシス性によって規定される(高橋(2015) および Takahashi (2017) 参照)。すなわち、与格の人物から移動物が離れていくという遠心的 (centrifugal) 移動では「使役」「被害」の解釈が可能となる一方で、移動物が与格の人物に近づいてくるという求心的 (centripetal) 移動では「被害」の解釈のみが可能となる。(17)~(20) はコーパスから収集された事例である。

(17) „Mir ist die Zeitung aus der Hand gefallen, me-DAT is the newspaper out.of the hand fallen als ich das las.“

(Nürnberger Nachrichten, 12.6.1990, S. 9)

「読んでいたときに、私は新聞を手から落としてしまった」「遠心的移動」[使役]

(18) (...) weil ihm der Reifen vom Rad gesprungen war because him-DAT the tire from.the wheel sprung was und er dieses Malheur darauf von Hand beheben musste.

(Die Südostschweiz, 3.12.2007)

なぜなら、彼はホイールからタイヤが弾けとんでしまい、自分の手でこの不運を取り除かなければならなかったからだ。「遠心的移動」[被害]

(19) „Die Koffer sind uns auf die Köpfe gefallen, the suitcases are us-DAT onto the heads fallen

die Leute wurden auf den Boden geworfen und schrien.“ (Die Presse, 2.4.1997)

「スーツケースが私たちの頭の上に落ちてきて、人々は床に投げ出されて、叫び声をあげた。」

「求心的移動」[被害]

(20) (...) dass der Regenwasserkanal die Fluten nicht mehr aufnehmen konnte und

das Wasser den Leuten in die Keller gelaufen ist the water the people-DAT into the cellars run is

(Braunschweiger Zeitung, 2.6.2008)

雨水排水路が大水を留めておくことができなくなり、水が人々の家屋の地下室へと流れ込んだ。「求心的移動」[被害]

以下2.2節では、移動動詞においてなぜこのような条件下で「使役」と「被害」の解釈が分かれるのか、事象構造の枠組みを用いて分析する。

## 2.2 「被害」と「使役」解釈の分化：移動動詞の場合

移動動詞の自由与格構文では、移動の起点や着点などを表す経路項がほぼ必須である (Takahashi 2017: 367参照<sup>4)</sup>)。事象構造の観点からすると、移動動詞は経路項と共に起した場合、時間的に区切られた・限界的 (telic) な「変化」(transition; T) を表す (Maienborn 1990参照)。その事象構造は、以下の (21) のように図式化される<sup>5)</sup>。

(21) 「変化」(T) としての移動

T  
└───┘  
LOC(x,IN(u))    ¬LOC(x,IN(u))

または

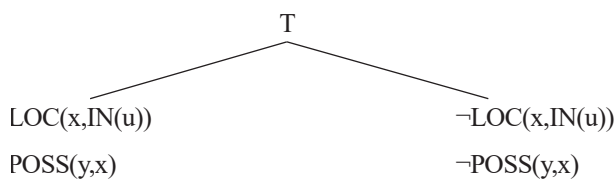
T  
└───┘  
¬LOC(x,IN(u))    LOC(x,IN(u))

(例) Der Ball (x) rollte aus dem Spielfeld (u). / Der Ball (x) rollte ins Aus (u). ボールがフィールドから転がり出た。／ボールが場外に転がり出た。



このような「変化」としての移動はつねに、初発段階である場所に位置していた対象が、終結段階ではそれとは別の場所にあるという状況を意味する。例えば「ボールがフィールドから転がり出た」では、移動の初発段階では「フィールド」にあった「ボール」が、終結段階ではそれとは別の場所（ここでは「フィールドの外」）にあるという状況が表される。さらに移動動詞の自由与格構文では、上述のとおり、与格の人物と対象の移動物とのダイクシス性に鑑みて「遠心的移動」と「求心的移動」が区別される。移動物が与格の人物のもとから離れていく「遠心的移動」では、両者の間にある種の「所有」関係の変化を読み取ることができる。それはすなわち、初発段階で与格の人物のもとにあった移動物が終結段階ではそのもとからなくなってしまうという、所在の変化である。このような関係は、上掲の(17)を例にすると、以下の(22)のような事象構造で図式化される。

(22) 自由与格構文：遠心的移動の場合



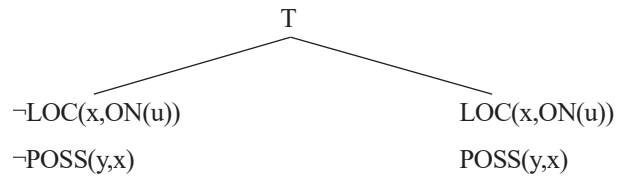
(例) Mir (y) ist die Zeitung (x) aus der Hand (u) gefallen.  
「新聞を手から落としてしまった」[使役](=17))

(22) のような事象構造で分析される「遠心的移動」においては、対象の移動物は初発段階においてのみ、与格のもとに存在する。この状況下で、その対象物を本来であれば意のままにすることができたはずの与格の人物には、その変化の責任が帰せられることになる。こうして、自由与格構文の「使役」解釈—与格の人物が意図せず対象の変化を引き起こした—が可能となるのである。

このような表される移動の遠心性 (centrifugality) によって可能となる所有・所在の関係に基づく推論は、「求心的移動」では認められない。与格の人物に対して移動物が近づいてくる「求心的移動」では、両者の所有関係が「変化」の終結段階においてのみ成り立つためである。「求心的移動」の自由与格構文の事象構

造は、上掲の(19)を例にすると、以下の(23)となる。

(23) 自由与格構文：求心的移動の場合



(例) Die Koffer (x) sind uns (y) auf die Köpfe (u) gefallen.  
「スーツケースが頭の上に落ちてきた」[被害](=19))

(23) のような「求心的移動」では、対象の移動物は終結段階ではじめて与格の人物のもとに存在することになる。この状況下においては、対象物の「変化」の責任を与格の人物に負わせることはできない。そもそも自らのもとにない対象物は、与格の人物の意のままにならないためである。こうして「使役」の解釈は排除され、与格の人物が対象物の「変化」から望ましくない影響を受けるという「被害」の解釈のみが得られるのである。

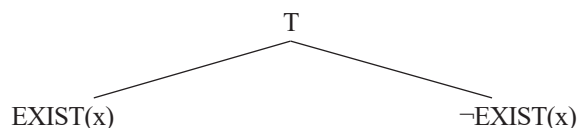
## 2.3 「使役」解釈のメカニズム：状態変化動詞の場合

2.2節で移動動詞の例をもとに明らかとなった「使役」解釈の条件—与格の人物と対象物との間の「所有」関係が初発段階においてのみ成立すること—は、状態変化動詞のケースにもあてはまる。2節の冒頭で述べたとおり、zerbrechen (= *break*) のような自動詞・他動詞が同形態の状態変化動詞は、自由与格構文で「被害」解釈とならび「使役」解釈も許すという点で、sich öffnen (= *open*) のような再帰の状態変化動詞から区別される。Aoki (2010) によると、これらの状態変化動詞の差異は、対象の本質的な変化を表すか否かによるとされる (ibid.: 60f.). その分析によれば、zerbrechen タイプでは対象の本質的な変化が表される一方で、sich öffnen タイプでは対象の本質的な変化は表されない。言いかえるならば、zerbrechen タイプでは動詞で表される変化をこうむることで、問題となる対象物の存在そのものが失われてしまう。他方で、sich öffnen タイプでは表される変化をこうむったあとも、対象は変わらず存在するということになる。

このような zerbrechen タイプと sich öffnen タイプの違いを、以下、事象構造における違いとして示す。

両者の事象タイプはいずれも限界的な「変化」(T)である。ただし, zerbrechenタイプと sich öffnenタイプでは, 「変化」の下位状態がそれぞれ異なる。対象の本質的变化を表す zerbrechenタイプでは, それに応じて以下の(24)のように, 「変化」の下位状態が対象の存在に関わるものとして分析される<sup>6)</sup>。

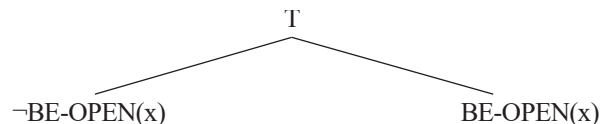
(24) zerbrechenタイプの状態変化動詞



(例) Die Vase zerbrach. 花瓶が割れた。

zerbrechenタイプとは異なり, 対象の本質的变化が表されない sich öffnenタイプは, 以下の(25)のように示される。ここでは, 下位状態は対象の存在を問題とするものではなく, あくまで対象の性状を叙述するものである(例えばBE-OPEN「開いた」状態)。

(25) sich öffnenタイプの状態変化動詞

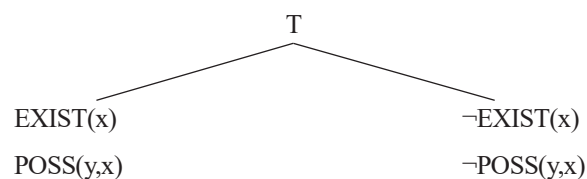


(例) Die Tür öffnete sich. ドアが開いた。

(24)と(25)で示した事象構造をもとに, 以下では, zerbrechenおよび sich öffnenに代表される状態変化動詞の自由与格構文を分析する。

まず, zerbrechenタイプにおける自由与格構文の事象構造は, 上掲(14)を例にすると, (26)のように示される。

(26) 自由与格構文: zerbrechenタイプの場合



(例) Die Vase (x) zerbrach dem Hans (y).

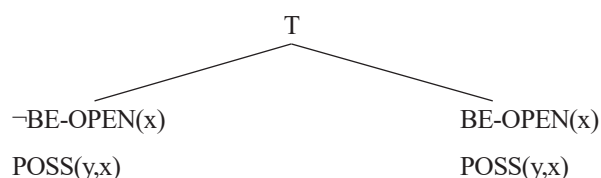
「花瓶が割れてしまった」[被害]

「花瓶を割ってしまった」[使役](=(14))

(26)の事象構造は「対象xが存在する」から「対象xが存在しない」への変化(T)を表し, 同時にその変化の初発段階で「yがxを所有している」ことを示している。ここで意味関数POSSによって表される「所有」関係は, 対象xがyの所有物であるという状況のみならず, xが一時的にyの管理下にあったというような状況も含む。実際に, 上掲(14)=(26)の例では, 「花瓶」が「ハンス」の所有物であり, その「花瓶」が例えば地震で床に落ちて割れてしまうという場合もあれば, 「ハンス」がたまたま自分のものではない「花瓶」を手にしたり, 触れたりした折にうっかり落として割ってしまうという場合もありえる。(26)では, 対象物の「花瓶」は表される変化(「割れる」)をこうむったあとには, もはや「花瓶」そのものとしては存在しない。それに依じて, 初発段階で成立していた与格の人物と「花瓶」との所有関係は, 変化のあとの終結段階では失われてしまう。この状況下において, 対象物のこうむる変化の責任が, それを初発段階において「所有」し, 意のままにできたはずの与格の人物に負わされるのである。このように zerbrechenタイプでは, 2.2節の「遠心的移動」が表される移動動詞の場合とまったく同じように, 与格の人物と対象物との間に「変化」の初発段階においてのみ成立する所有関係が認められ, それにより, 「被害」のほかに「使役」の解釈が可能となる。

他方, sich öffnenタイプでは, 対象の性状に関わる変化を表すという語彙的意味に鑑みて, 初発段階においてのみ成立する所有関係は認められない。上掲(15)を例に, このタイプにおける自由与格構文の事象構造を示すと, 以下の(27)となる。

(27) 自由与格構文: sich öffnenタイプの場合



(例) Der Maria (y) öffnete sich die Tür (x).

「ドアが開いた」[被害]

#「ドアを開けてしまった」[使役](=(15))

(27) の事象構造は「対象xが開いているという状態」から「対象xが開いていないという状態」への変化(T)を表し、同時に「yがxを所有している」ことを示す。ここでの対象物の「ドア」は—zerbrechenの例における「花瓶」のようにその所有者は想定しにくいものの—与格の「マリア」が自分で開けようと思えば開けることのできた、(少なくとも一時的には)その管理下にあったものとして理解される。上述のとおり、sich öffnenタイプでは表される変化をこうむる対象は、その変化のあとにもその存在が認められる。すなわち、初発段階で成り立つ与格の人物と対象物との間の所有関係は、終結段階においても保たれたままである。このように、sich öffnenタイプでは「変化」の前後で与格と対象との所有関係が失われないために、与格は対象とともにその「変化」の推移を体験する人物として解され、それに応じて「被害」の解釈のみが許されるのである。

## 2.4 自由与格構文における「使役」解釈の特徴

前節までの議論をもとに、ドイツ語自由与格構文で認められる「使役」解釈の特徴は、次のようにまとめられる：

- 表される事象は一移動であれ、状態に関わるものであれ—限界的な「変化」を表すものでなければならない。
- 表される「変化」と呼応して、終結段階において失われる与格の人物と対象物との「所有」関係が「使役」解釈の可能性を決定づける。
- 与格の人物には、表される事象を引き起こす意図は認められない。

## 3. 構文解釈の条件：have使役・「一させ」使役との対比

前節で取り上げたドイツ語の自由与格は、英語のhave使役との類似性が指摘されることがある（例えばMcIntyre 2006）。自由与格構文とhave使役文は、どちらも表される中核事象に対して新たな参与者（自由与格では与格、have使役ではhaveの主語）が付け加えられる構文であるといえる。さらにhave使役文

は、以下の例で示されるように、「使役」の意味のほかに「被害」の意味を表すことが知られている（(28)および(29)は久野・高見 2007: 219からの引用）。

- (28) a. The teacher had his students read three books. [使役—「読ませた」]  
 b. The coach had the players run for another hour. [使役—「走らせた」]
- (29) a. I had someone pick my pocket on a jam-packed train yesterday. [被害—「すられた」]  
 b. For the first time ever in my life, I had someone threaten to kill me tonight. [被害—「脅された」]

Ritter and Rosen (1993) によると、have使役文は補部で表される事象を「拡張」する働きがあり、その拡張の方向が始点に向かうか、終点に向かうかで可能な解釈が分かるとされる。すなわち、補部事象に対するhaveの主語の関与が事象の始点にさかのぼって認められる場合は「使役」読みで解釈される一方で、その関与が補部事象の終点で認められる場合には「被害」の読みが得られるとされる<sup>7)</sup>。

英語のhave使役とならび、日本語の「一させ」使役文においても、「使役」のほかに「被害」の解釈が認められる（(30)はOehrle and Nishio 1981: 166f.からの引用）。

- (30) a. 父親は子供を死なせた。[使役][被害]  
 b. 太郎は会社を倒産させた。[使役][被害]

(30a)の「一させ」使役文は、「父親」が子供を死に至らしめる状況を意図的に放任したり、そうした状況を作り上げたりしたのではない限り、むしろ「父親は子供に死なせた」のような受動文と意味的に近い。1.3節で紹介したとおり、こうした使役文は、早津（2016）によるところの間接受身との「似通い」が認められる例である<sup>8)</sup>。(30b)も(30a)と同様、「太郎」が意図を持って会社を倒産に追い込んだのではなく、そうした状況を防げなかったことへの後悔や自責の念が表された場合に、「太郎は会社が倒産してしまった」のような被害の意味を帯びる。Oehrle and Nishio (1981)



によると、「一させ」使役文で「被害」の読みが生じるためには、主語の使役主が表される対象の変化に対し、ある種の責任を負う立場であることが必要である (ibid.: 168). 例えば, (30b) の「倒産させた」が「被害」の意味を帯びるためには、主語の「太郎」が会社の所有者でなければならない。また, (30a) の「死なせた」の例では、父親と子供が逆の立場—「子供が父親を死なせた」であれば、「被害」の意味は生じにくい。高見 (2011) はこうした使役文を、「主語にとって好ましくない事態が生じたことに対して、その事態の発生を食い止められなかった責任を主語が感じているという点を表すもの」として、「責任使役」と呼び、「一させ」の持つ純粋な使役用法から区別している (ibid.: 134) <sup>9)</sup>。

Ritter and Rosen (1993) は、日本語の「一させ」使役を英語の have 使役と同様に中核事象が拡張される現象としてみなしている。その分析によると, (30) の「一させ」使役文は一かたちのうへでは「使役」であるが一あくまで「被害」の意味のみを表すという。その証左としては、日本語の「死ぬ」にあたる英語の die のようないわゆる非対格動詞<sup>10)</sup> が have 使役文で用いられた場合に、「被害」の解釈しか得られないことがあげられている (Ritter and Rosen 1993: 526f. 参照)。このような Ritter and Rosen (1993) の分析に対して、高見 (2006) では、非対格動詞の「一させ」使役文で実際に「使役」解釈となる例があげられ、「一させ」使役文が「使役」と「被害」のどちらの解釈になるかは、主語の使役主の意図性の有無に応じて決まるとされている。

以下本節では、英語の have 使役文および日本語の「一させ」使役文の例をあげ、それらを事象構造の枠組みで分析する。そうすることで、先行研究で議論される可能な解釈の条件を、ドイツ語の自由与格と対比させながら検討することを試みる。

### 3.1 英語の have 使役文

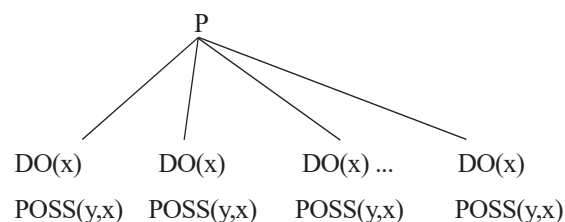
have 使役文は様々な動詞で広範に認められるものの、Ritter and Rosen (1993) の指摘によれば、「使役」の解釈が例えば die のような非対格動詞では不可能であるという制約がある。以下、「使役」解釈のみが可

能な場合、「使役」と「被害」の解釈が可能な場合、「被害」解釈のみが可能な場合の例をあげながら、それぞれについて、事象構造の枠組みで分析する。

まず、read のような行為動詞では、上掲 (28a) のとおり、「使役」の解釈のみが可能である。また、run のような移動動詞は、経路項を伴わない場合、その have 使役文が上掲 (28b) のとおり「使役」としてのみ解される。read に代表される行為動詞で表される事象、run に代表される（経路項を伴わない）移動動詞で表される事象はともに、非限界的 (atelic) な「過程」(process; P) を表す<sup>11)</sup>。(28) の read と run を例に、これらの動詞が have 使役文の補部となる場合の事象構造を示すと、以下の (31) となる。

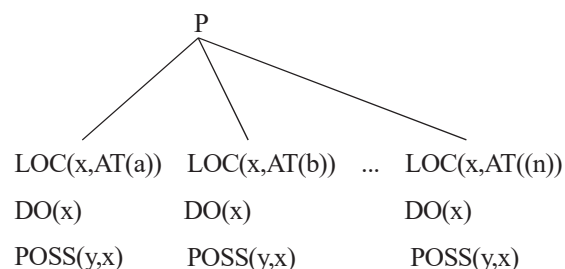
#### (31) 「使役」解釈のみ可能な場合

##### a. 行為動詞



(例) The teacher (y) had his students (x) read three books.  
「読ませた」[使役] (= (28a))

##### b. 移動動詞



(例) The coach (y) had the players (x) run for another hour.  
「走らせた」[使役] (= (28b))

(31a) の図式は「xがある行為を行う」と同時に、「y が x を所有している」ことを表している。(31b) は「x が任意の地点 (a, b, …n) に位置づけられていく」と同時に、「y が x を所有している」ことを表す。ここでの「所有」関係は、2.3節のドイツ語 zerbrechen の例 (= (26)) や sich öffnen の例 (= (27)) で述べたとおり、狭義の所有関係だけでなく、(一時的にでも) その人

物の管理下にあるという状況も含む。(31)において、haveの主語である「教師」や「コーチ」は補部で表される事象の始点に関わるのみで、補部で表される事象—「読む」や「走る」—は、その担い手である動作主の「生徒たち」や「選手たち」によって行われるものである。しかし、当該事象がそもそもhaveの主語で示される人物の介在によって始められたものであるために、「生徒たち」や「選手たち」がその行為を続ける限り、彼らはhaveの主語である「教師」や「コーチ」の影響下にあるとみなされると考えられる(=POSS(y,x))。また、(31)のreadとrunの例からは、動作主(actor)の主語を持つ動詞がhave使役文の補部に埋めこまれた場合には、「使役」の解釈が優勢となることが示唆される。

次に、「使役」「被害」の解釈が可能な例を取り上げる。次のRitter and Rosen (1993)であげられている例のとおり、walkがout of his lectureのような表現を伴うと、「使役」の解釈のみならず、「被害」の解釈が可能となる((32)はRitter and Rosen 1993: 525からの引用)。

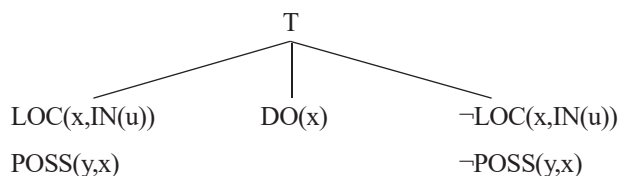
(32) John had half the students walk out of his lecture.

「クラスから出ていかせた」[使役]

「クラスから出ていかれた」[被害](= (8))

(32)で表されるのは、「ジョン」のクラスにいた生徒たちが彼のクラスからいなくなるという、限界的な「変化」としての移動である。2.2節(21)であげた「変化」としての移動の事象構造をもとに、(32)のhave使役文は、以下の(33)のような構造で示される。

(33)「使役」「被害」解釈が可能な場合



(例) John (y) had half the students (x) walk out of his lecture.

「クラスから出ていかせた」[使役]

「クラスから出ていかれた」[被害](=(32))

(33)のとおり、walk out of his lectureの例では、事象の始点に関わるhaveの主語「ジョン」は、補部の主語である「生徒たち」を初発段階ではその影響下に置いていたものの、生徒たちが彼のいる「クラスから出ていく」ことで影響を及ぼすことができなくなる。このように、(33)の例では、事象の始点で成立していた所有関係が補部で表される「変化」(=生徒たちがジョンのクラスにいる／生徒たちがジョンのクラスにいない)によって失われてしまう。それがhaveの主語で示される「ジョン」の意思によるものであるならば、「ジョンは彼の生徒の半分にクラスから出ていかせた」という「使役」の解釈となる。他方で、「クラスから出ていく」ことが補部で示される動作主の「生徒たち」の意思によるものであるのならば、haveの主語である「ジョン」は本来であれば自らの影響下にあり、意のままにできたはずの事象を防げなかった人物とみなされ、一般にその事象から不利益をこうむる「被害」の解釈となる。このように、walk out of his lectureの例からは、have使役文で「使役」と「被害」の両解釈が可能となる背後には、補部の事象が「動作主」によって行われるものであることと同時に、その事象がある種の変化を表すことがあると考えられる。さらに、haveの主語と補部の主語との間に成り立つ所有関係の変化があることで、本来であればhaveの主語が意のままにできたはずの事態を防げなかったという意味で、その事態から影響を受ける「被害」の解釈の余地が開かれる。

最後に、have使役文で「被害」解釈のみが得られる例を取り上げる。Ritter and Rosen (1993)によると、(34)のdieのような非対格動詞では「使役」の解釈は認められず、「被害」の解釈のみが可能である((34)はRitter and Rosen 1993: 526からの引用)。

(34) Ralph had Sheila die.

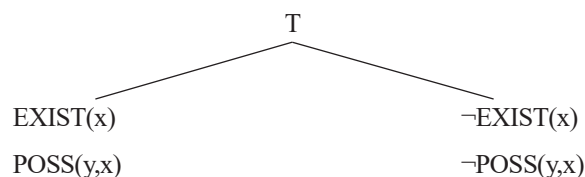
#「死なせた」[使役]

「死なれた」[被害]

dieのような非対格動詞は、2.3節で取り上げたドイツ語のzerbrechenタイプと同様に、対象の本質的变化を表すもの、すなわちその存在に関わる「変化」を表

すと考えられる。よって、(34) の have 使役文の事象構造は、以下の (35) として示される。

(35) 「被害」解釈のみ可能な場合



(例) Ralph (y) had Sheila (x) die.

「死なれた」[被害] (= (34))

(35) のとおり、die の have 使役文の補部主語は動作主 (actor) ではなく、変化をこうむる対象 (theme) と見なされる。さらに、補部の対象が本質的な「変化」を受けた(「死んでしまった」)ことでその存在そのものがなくなってしまったことにより、表される「変化」の初発段階で認められた have の主語と補部の主語との間の所有関係も失われてしまう。このような状況下で、have の主語は表される事象から望ましくない影響をこうむる人物とみなされ、「被害」の解釈が得られると考えられる。

### 3.2 日本語の「一させ」使役文

日本語の「一させ」使役文は、(36) の例のように広く「使役」の意味を表すとされる ((36) は高見 2006: 500からの引用)。

(36) a. 私は子供にジャンプさせた。[使役]

b. 先生は学生に本を3冊読ませた。[使役]

その一方で、上掲 (30) で示したとおり、「一させ」使役文は、その主語が対象の変化に対し責任を負う立場であるという環境下で「被害」の意味を帯びることがある。以下、(30) を (37) として再掲する ((37) は Oehrle and Nishio 1981: 166f.からの引用)。

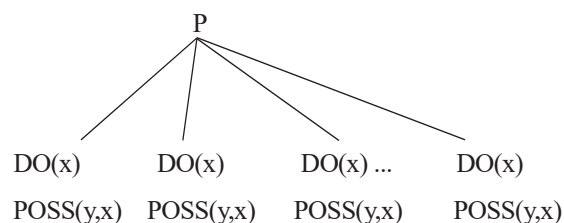
(37) a. 父親は子供を死なせた。[使役][被害]

b. 太郎は会社を倒産させた。[使役][被害]

上掲 (36) における「ジャンプする」「読む」は、

どちらも動作主による行為を表す。「読む」を例にすると、その「一させ」使役文の事象構造は、以下の (38) として示される。

(38) 「使役」解釈のみ可能な場合



(例) 先生(y)は学生(x)に本を3冊読ませた。

[使役] (= (36b))

(38) の図式は「xがある行為(ここでは『読む』)を行う」と同時に「yがxを所有している」ことを示し、関数POSSで表される「所有」関係は「xが(一時的にでも)yの管理下にある」という状況も含む。(38) のとおり、行為動詞の「一させ」使役文は3.1節 (31) で示した英語の have 使役文と同様に分析される。すなわち、主語の人物「先生」は表される事象—「本を3冊読む」の始点のみに関与するものの、補部で示される人物—「学生」によってその行為が続けられる限り、その人物を自らの影響下に置いている。このような状況のもとで、「一させ」使役文は「使役」の意味のみを表す。

他方で、「一させ」使役文の補部で何かしらの「変化」が表される場合、「使役」の解釈のほかに「被害」の解釈が可能となる。この場合の「変化」は、上掲 (37) の「死ぬ」「倒産する」のように対象の存在に関わる本質的な変化を表すこともあれば、以下の (39) の「凍てつく」のように対象の存在そのものには関わらない、性状の変化を表すこともある ((39) は高見 2006: 507からの引用)。

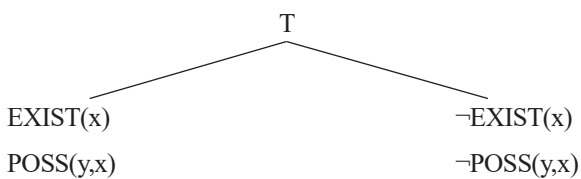
(39) 母は、霜で野菜を凍てつかせてしまった。

(37) および (39) の例で示されるとおり、「一させ」使役文では、補部が対象の本質的な変化を表すか否かにかかわらず「被害」の解釈が認められる。事象構造の観点からは、「死ぬ」のような対象の本質的な変化を表

す動詞は 2.3節で取り上げたドイツ語の状態変化動詞のうち zerbrechen タイプと同様に ((24) 参照), 「凍てつく」のような対象の性状の変化を表す動詞の事象構造は sich öffnen タイプと同様に ((25) 参照), それぞれ分析される。上掲 (37a) および (39) を例にすると, 補部の動詞が本質的变化を表す場合あるいは性状の変化を表す場合の「一させ」使役文の事象構造は, それぞれ以下の (40a), (40b) のように示される。

(40) 「使役」「被害」解釈が可能な場合

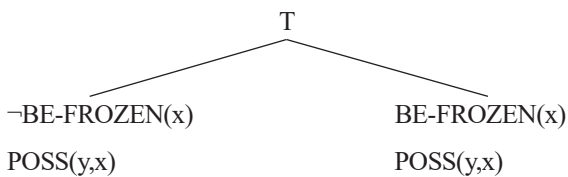
a. 本質的变化を表すもの



(例) 父親(y)は子供(x)を死なせた。

〔使役〕〔被害〕 (= (37a))

b. 性状の変化を表すもの



(例) 母(y)は野菜(x)を凍てつかせた。

〔使役〕〔被害〕 (= (39))

### 3.3 それぞれに異なる「使役」の解釈—ドイツ語と日英語の比較

以上, 3.1および3.2では, 英語の have 使役文および日本語の「一させ」使役文で「使役」ないし「被害」の解釈が可能・不可能となる例をあげ, それぞれについて, 事象構造の枠組みを用いた分析を行った。ここでは, have 使役文および日本語の「一させ」使役文とドイツ語の自由与格構文を対比させて, 可能な解釈の条件づけがどのように異なるのかを明らかにする。

ドイツ語の自由与格構文では, 「使役」の解釈はそもそも対象 (theme) のある種の「変化」が表される場合においてのみ可能となる (2.4参照)。動作主 (actor) が現れるような環境では, 「使役」の解釈は得られず, 「被害」の解釈のみが可能である<sup>12)</sup>。しかし, 英語の have 使役文では, 3.1でみたとおり, 動作主が現れる

環境においてのみ, 「使役」と「被害」という二つの解釈が競合しえる。「使役」とならんで「被害」の解釈が可能となるのは, walk out of his lecture のような動作主が現れ, かつ「変化」が表される環境 (上掲 (32) 参照) である。read や run の例 (上掲 (28)) に鑑みて, 動作主がある環境では「使役」の解釈が優勢となると考えられたことから, ドイツ語の自由与格構文において「使役」解釈の可能性を決定づける所有関係の変化は, 英語の have 使役文ではむしろ「使役」の意味が基底となるような環境下で, 「被害」の意味を読みこむために必要となるといえるだろう。Ritter and Rosen (1993) で指摘されるように, 例えば die のような非対格動詞の have 使役文で「使役」の解釈が許されないのは, これらの動詞が対象の変化を表すものであり, 補部で表される中核事象が動作主を欠いていることによると思われる<sup>13)</sup>。

日本語の「一させ」使役文に目を向けると, その補部で何らかの「変化」が表される場合に「使役」解釈と「被害」解釈が可能となる点で, ドイツ語の自由与格構文との共通性がある。ただし, 日本語の「一させ」使役文における「使役」「被害」の解釈は, ドイツ語の自由与格構文の場合とは異なり, 対象の本質的变化が表される否か, また, それと呼応して所有関係の不可逆的变化が表されるか否かという違いによらず可能である。日本語の「一させ」使役文は「使役」の意味で広く用いられ (上掲 (36) 参照), 「被害」の解釈が可能な例が限定的であることから, この構文では「使役」の解釈が基底にあるといえるだろう。そのような「使役」の意味を基底とする「一させ」使役文では, 対象の何らかの「変化」が表され, かつ主語の人物と対象との間に所有関係が読みこまれるならば, 主語が表される事態から影響をこうむるという「被害」の解釈が可能となると考えられる。この場合, 所有関係の読みこみは往々にして文脈に依存すると考えられる。

### 4. おわりに

以上本稿では, ドイツ語の自由与格構文において「被害」とならび「使役」解釈が可能となる条件を明らかにし, ドイツ語の自由与格構文と英語の have 使役文および日本語の「一させ」使役文を対比させ, それら



の共通点と相違点を示したうえで、各構文における可能な解釈の条件づけを明らかにした。

第2節における議論のとおり、ドイツ語の自由与格構文では、可能な解釈がまず意味論的に規定される。そのうえで、両解釈が可能な環境下で当該の構文が実際に「使役」として解釈されるか「被害」として解釈されるかは、最終的には文脈次第で決定される (Takahashi 2017参照)。英語のhave使役文は、Ritter and Rosen (1993) によると、補部の中核事象が「始点」方向に拡張されるか、「終点」方向に拡張されるかに応じて「使役」「被害」が分かるとされる。本稿の分析から、両方向への拡張が可能となるのは、中核事象に「動作主」が現れると同時に、その事象が何らかの「変化」を表す場合であることが示された。その環境下で「使役」「被害」の解釈を分けるのは、補部で表される行為がhaveの主語の意図によるものか否かによると考えられた。このように英語のhave使役文では、ドイツ語の場合と同様に、「使役」「被害」の両者が可能となる条件がまず意味論のレベルで規定され、実際の解釈は文脈に鑑みて語用論的に読みこまれるといえる。日本語の「一させ」使役文では、ドイツ語の自由与格構文の場合と同様に、対象の変化が表される環境でのみ「使役」と「被害」の解釈が可能である。ただし、「一させ」使役文で「使役」のほかに「被害」解釈が可能となるのは、ひとえに主語と補部の対象との間の所有関係の読みこみがあるかどうかによると考えられた。

ドイツ語の自由与格構文、英語のhave使役文、日本語の「一させ」使役文でそれぞれ「使役」と「被害」の解釈が競合する場合をまとめると、次の表1のとおりとなる。

表1:「使役」と「被害」の解釈が競合する環境

	ドイツ語 自由与格	英語 have使役	日本語 「一させ」
中核事象	[T]	[T]	[T]
動作主の 有無	[-]	[+]	[-]
所有関係の 変化	[+]	[+]	[+] [-]
使役主の 意図性	[-]	[+] [-]	[+] [-]

このように言語間で「使役」「被害」の解釈が競合する環境が異なるのは、それぞれの構文の特性によると考えられる。ドイツ語の自由与格構文では、「被害」の意味が基底にあり、一定の環境下で「使役」解釈の可能性が開かれる。英語のhave使役文は、Ritter and Rosen (1993) によると、事象を「持つ」ことがその本質であり、「使役」「被害」のどちらかが基底にあるわけではない。その一方で、日本語の「一させ」使役文では、「使役」の意味が基底にある。いずれの解釈が基底となっているか、あるいは両解釈の可能性がオープンであるか次第で、動作主の有無や所有関係の変化といった構文解釈で必要となる条件も異なると考えられる。本稿の分析で明らかになったとおり、ドイツ語は「被害」解釈を基底としつつ、状態変化動詞の場合には動詞の語彙的意味、移動動詞の場合はそのダイクシス性に条件づけられて「(意図しない)使役」の意味が加わる。他方日本語では、「使役」をベースとする構文で使役主による積極的関与が認められず、その意図性が失われる環境において、使役主にとって望ましくない事態の生起を表す「被害」解釈が顕在化する。両者の中間にあるのが、「使役」「被害」解釈に等しく開かれている英語のhave使役であるといえる。

注

- 1) ドイツ語の自由与格構文、英語のhave使役文、日本語の「一させ」使役文で観察される異なる意味の呼び方は、先行研究においてそれぞれ異なる。例えばドイツ語の自由与格に関しては、本稿で「使役」という用語で指す意味は「非意図的使役(主)」,「被害」で指す意味は「影響」と呼ばれる (McIntyre 2006, Schäfer 2008など)。また、英語のhave使役や日本語の「一させ」使役については「使役」および「経験」といった呼び方がされることがある (Ritter and Rosen 1993, 高見2006など)。以下本稿では、用語の不統一による混乱を避けるために、各構文で可能な解釈を一貫して「使役」「被害」と呼ぶこととする。「影響」や「経験」という広い意味を指す用語ではなく「被害」という用語を用いるのは、二つの解釈が競合する環境が実際には一本稿で示すとおり一利益や恩恵ではなく、不利益や迷惑などの望ましくない「被害」

の意味を帯びるためである。

- 2) Schäfer (2008) によれば、それぞれの解釈は「非意図的使役主 (unintentional causer)」ないし「影響 (affectedness)」の解釈と呼ばれる。
- 3) 「受動的移動」では、その移動を引き起こした原因として、移動物のほかの外的要因 (例えば衝撃、重力など) が想定される。高橋 (2015) および Takahashi (2017) におけるコーパス調査では、移動を推進する力が移動主体自身に備わる「能動的移動」が表される場合、自由与格構文で「被害」解釈のみが可能であり、「使役」解釈は認められないことが明らかとなった。以下、(a) は「能動的移動」の自由与格構文の例である。
 

(a) Mir lief ein Reh ins Auto.  
me-DAT ran a roe.deer into.the car  
「鹿が走って車にぶつかった」[被害]  
#「鹿を車にぶつけさせた」[使役]
- 4) Takahashi (2017: 367) に記載のとおり、コーパス調査で収集された移動動詞の自由与格構文の事例 (全 240 例) はすべて移動の起点・着点・通過点のいずれかを表す経路項 (方向の前置詞句) と共起していた。
- 5) 以下、本稿の事象構造分析は、Pustejovsky (1991) による事象構造の基本タイプに依拠している。
- 6) 「存在」に関わる意味関数 EXIST は、Van Valin (2005: 55) に依っている。
- 7) Ritter and Rosen (1993) では、各解釈は「使役 (Cause)」ならびに「経験 (Experience)」と呼ばれる。本稿では取り上げないが、英語の have 使役では「経験」解釈として (29) のような被害のほか、以下の (b) のような利益・恩恵の意味も表される ((b) は高見 2011: 170 からの引用)。
 

(b) I had a total stranger show me the way to the station.  
「知らない人に道を教えてもらった」
- 8) 使役文が間接受身文と通じる意味を表す場合があることは、寺村 (1982) でも指摘されている。寺村 (1982) によると、両者の共通性は「ある事象に対して、その事象の外にある第三者がかかわる、そのかわり方を示す表現だという点」にあるとされる (ibid.: 299)。
- 9) 日本語記述文法研究会 (編) (2009: 269) では、「有

責的使役文」と呼ばれている。

- 10) ふつう他動詞の目的語に現れるような意図を持たない対象 (theme) を主語にとる自動詞を「非対格動詞」と呼ぶ。die「死ぬ」のような存在や出現に関わる動詞も一般に非対格動詞に分類される。
- 11) 例えば Pustejovsky (1991) 参照。
- 12) 注 3 の「能動的移動」を表す場合を参照のこと。
- 13) Ritter and Rosen (1993: 527) では、「被害」の解釈しか得られない (34) のような例においても、補部の事象がその主語の意図的行為を表すと捉えることができる場合 (例えば Ralph が映画監督で Sheila が俳優であるような場合) に、「使役」の解釈が可能であるとされている。このことから、have 使役文が「使役」の意味で解釈されるためには、動作主の存在が前提とされることがうかがえる。

## 謝辞

本稿は、科学研究費補助金 (17K13441) の助成を受けた研究の成果の一部に基づいている。

## 参考文献

- Aoki, Y. (2010) „Reflexive Inchoativa im Deutschen und ar-Inchoativa im Japanischen: Das Antikausativ in lexikalisch-semanticischer Hinsicht“, *Neue Beiträge zur Germanistik* vol. 9 (1), pp. 57-72.
- Duden (2005) *Die Grammatik: unentbehrlich für richtiges Deutsch. 7., völlig neu erarbeitete und erweiterte Auflage*, Mannheim: Dudenverlag.
- 早津恵美子 (2016) 『現代日本語の使役文』ひつじ書房。
- Helbig, G. (1984) „Die freien Dative im Deutschen“, G. Helbig ed., *Studien zur deutschen Syntax. Bd. 2*, Leipzig: VEB Enzyklopädie, pp.189-211.
- 久野暉・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味—生成文法と機能的構文論』開拓社。(第 8 章「使役文の表す意味—Have 使役文を中心に」)
- Maienborn, C. (1990) *Position und Bewegung: Zur Semantik lokaler Verben*, Stuttgart: IBM Deutschland.
- McIntyre, A. (2006) “The interpretation of German datives and English *have*”, D. Hole et al., *Datives and*

- Other Cases: Between Argument Structure and Event Structure*, Amsterdam/Philadelphia: J. Benjamins, pp. 185-212.
- 日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法 2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』くろしお出版.
- Oehrle, R. and Nishio, H. (1981) "Adversity", A. K. Farmer and C. Kitagawa eds., *Coyote Papers. Proceedings of the Arizona Conference on Japanese Linguistics. The Formal Grammar Sessions*: University of Arizona Linguistics Circle, pp. 163-187.
- Ogawa, A. (2003) *Dativ und Valenzerweiterung: Syntax, Semantik und Typologie*, Tübingen: Stauffenburg.
- Pustejovsky, J. (1991) "The syntax of event structure", *Cognition* vol. 41, pp. 47-81.
- Ritter, E. and Rosen, S. T. (1993) "Deriving causation", *Natural Language and Linguistic Theory* vol. 11 (3), pp. 519-555.
- Schäfer, F. (2008) *The Syntax of (Anti-) Causatives: External Arguments in Change-of-State Contexts*, Amsterdam: Benjamins.
- 高橋美穂（2015）「事象の『所有』に基づく lassen および自由与格による項の拡張—ドイツ語の移動動詞を例に一」東京外国語大学大学院博士論文.
- Takahashi, M. (2017) „Affiziertheit und unabsichtliche Kausierung: Lesarten der Dativkonstruktionen bei Bewegungs- und Zustandsveränderungsverben“, *Deutsche Sprache. Zeitschrift für Theorie, Praxis, Dokumentation* vol. 45 (4), pp. 362-377.
- 高見健一（2006）「『一させ』形が表す『使役』と『経験』の意味」, 鈴木右文・高見健一・水野佳三編『言語科学の真髄を求めて—中島平三教授還暦記念論文集』ひつじ書房, pp. 499-511.
- 高見健一（2011）『受身と使役—その意味規則を探る』開拓社.
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.
- Van Valin, R. D., Jr. (2005) *Exploring the Syntax-Semantics Interface*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wegener, H. (1985) *Der Dativ im heutigen Deutsch*,